

連載

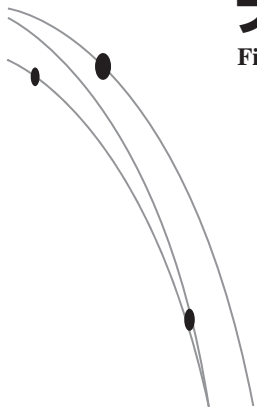
フィールド・アイ

Field Eye

シカゴから——①

名城大学 柳澤 武

Takeshi Yanagisawa



全米最長のストライキ

2010年にハワイで始めた在外研究は、2011年夏からシカゴへと場所を変え、初めての冬を迎えた。アメリカ中西部・イリノイ州の冬は、とりわけ体感的な寒さが厳しい。気温がマイナス20度まで下がりつつ、さらにミシガン湖からの強風が吹き荒れることが多いからだ。シカゴが、「風の街（Windy City）」と呼ばれているのも納得である。あまりの強風に、持参した雨傘は瞬時に壊れてしまい、通気口による強風対策用の傘を購入したほどである。

この街で長年にわたり、外気に晒されながらピケット・ラインを張っている労働者たちがいる。ミシガン湖近くの市街地に位置する कांग्रेस・プラザ・ホテルでは、アメリカ史上最長ともいわれる、8年以上にも及ぶストライキが継続している。同ホテルは、1893年のシカゴ万国博覧会にあわせて建設された歴史あるホテルで、20世紀初頭には歴代の大統領はじめ著名人が多く利用した。現在でも、石造りの外観は独特の風格を漂わせており、ミレニアムパークにも面した立地の便利さもあり、同ホテルを選択する観光客も少なくない。

2003年6月15日から始まったストライキは、ホテル側が提示した、賃上げを数年間——2002年時の8.83ドルのまま——凍結すること、福利厚生（＝健康保険の会社負担割合）を削減すること、各組合員の業務を下請けに出す権利をホテル側が留保すること、という3つの条件が契機となった。ストライキに参加している組合員のEfrainに話を聞いたところ、当初は2～3カ月で終わるだろうと見込んでいたのだが、それ以降、賃金は1セントたりとも上昇することなく、

時間だけが経過していったとのことである。ホテル側は、一部の業務にアウトソーシングを導入し、非組合員の労働者を利用することで、ストライキの影響を最小限度に抑え、運営を続けてきた。そして、昨年夏に行った最後の団体交渉でも、やはり会社側は賃上げに応じなかったという。

一方、 कांग्रेस・プラザ・ホテル側の代理人である Andjelkovich 弁護士は、労働組合は団体交渉の席で「現在の水準よりも2倍あるいは3倍の賃金や福利厚生を求めて」おり、さらには「労働組合が、現場の労働者にストライキを強要し、路上に放り出している」とTVニュースのインタビューで主張している。ちなみに、同地域のホテルで働く労働者の平均賃金は15.10ドルであり（2011年時点）、それに比べて、同ホテル組合員の賃金（上述）は州の最低賃金8.25ドルを僅かに上回るだけである。しかも、イリノイ州では最低賃金を10ドル近くに引き上げようという動きもあり、いよいよ最低賃金を下回る可能性も出てきた。それでも、ホテル側は、原資がないことを理由に賃上げを拒み続けており、今日まで膠着状態が続いている。

いずれにしても、これだけ長い間ストライキやピケティングが続いていると、入口付近での抗議活動やサービス等に対する宿泊客からの苦情も出てくる。シカゴには、年間3000万人の観光客が押し寄せ、これらの人々が87億ドルもの税収を市にもたらしているため、市としては観光客からの評判を無視することはできない。とりわけ、インターネットの宿泊料金比較・予約代行サイトあるいは旅行代理店を通じての予約では、宿泊先のホテルでストライキが起こっていることなど、知る由もない。そこで、シカゴ市議会では「ストライキ告知条例」なるものが審議されることになった。この条例は、20人以上の被用者が15日以上ストライキを行いあるいはロックアウトされている場合には、潜在的な顧客に電話・印刷物・電子媒体により告知する義務を課すもので、旅行代理店やWeb予約サイトなど第三者にも適用されるという、アメリカでも他に類を見ない条例案であった。

この条例案は、「観光客には、ホテルを予約する前に、滞在の質に影響を与える状況について知る権利がある」と宣言しており、一見すると観光客の権利を守ることに重点が置かれているようにもみえる。しかしながら、その内実は、このストライキを中心とする労使紛争の延長戦であった。そもそも、この条例がコン

グレス・プラザ・ホテルを狙い撃ちにしたものであることは、誰の目にも明らかである。労働組合は、同条例の制定を全面的にバックアップし、同条例が団体交渉における新たな武器となることを期待していた。一方で、使用者側は同条例に激しく反対し、連邦法である全国労働関係法、あるいは言論の自由を保障する憲法修正第1条などに違反するとの主張もみられ、法廷闘争も辞さない構えであった。2009年10月、同条例案は23対22という僅差で否決され、最終的には廃案となったが、仮に成立していたならば、ホテル経営への大きな打撃となり、少なくとも何らかの歩み寄りがみられたかもしれない。

しかしながら、条例制定による事態打開の機会を逃したまま、ストライキは年越しを迎えることになった。28のホテルを組織化するUNITE-HEAR労組のHenry Tamarin ローカル1（シカゴエリア）代表は、就任以来、ホテル労働者の組織化を積極的に進めており、組合員からの信頼も厚い。彼は、毎年6月のストライキ記念イベントを、「家族の帰省」のようなものと表現した。なるほど、これだけストライキが長期化してしまうと、開始日に記念集会を行うのが「恒例行事」になるのかもしれない。実際、記念日の前後になると、様々な著名人がピケットに参加・演説にやってくる。イリノイ州選出のオバマ上院議員（当時）は、2007年に2度目のピケット参加を終え、「このピケットに戻ってきたことを誇りに思う。ストライキ参加者たちは、この数年間、いかなる天候のときも歩み続けてきた。いかに困難だったか、想像に難くない」との演説を行った。その際、大統領になった暁には再び戻ってくるとの発言もあったそうだが、現在までのところ、現職大統領によるピケット参加は実現していない。

2012年1月30日、日が暮れて寒さが一段と厳しくなったホテル前のミシガン通りで、白い息を吐きながらピケット・サインを掲げるEfrainたちと合流した。筆者も、マフラーを口から外して話しかけたが、冷気で喉が痛くなり、肺まで凍りそうになった。今日のピケット参加者は20人ほどで、シーズンオフというこ

ともあり、ホテルの玄関付近は閑散としている。それでも、集まった組合員たちは、ミシガン通りを往復しながら5時間近くピケットを張り続ける。ミシガン通りでのピケットイングや抗議活動は、真冬でも週25時間は行っているとのことである。そして、これらの活動を行いながら、自ら収入を得るために、Efrainは近くの工場でも働き続けている。ピケットイングのときに、以前は「均等な待遇を！」といったスローガンを大きな声で叫んでいたそうだが、「最近では、ちょっとした声を出すと、ホテル側がすぐに警察を呼ぶんだよ。そして、やってきた警察官から『デモは静かに行うように』と命令されるんだ」と、残念そうに呟いた。

この日は、他の組合員にも話を聞いた。今時の若者らしい雰囲気 Jose は、元々ハウスキーパーとして同ホテルで働いていたが、現在はピケットイングに参加しながら、やはり近くのレストランでウェイターの仕事を続けている。彼は、「参加者のほとんどが、別の仕事で稼ぎながら、9年近くになるストライキを続けてきたのさ」と語った。彼には、ストライキ中に誕生した、3歳と6歳の子供がいる。そして、ヤング・ジェネラルの「No Justice, No Peace」という曲を少しだけ口ずさんで、私に教えてくれた。このストライキから生まれた地元歌手によるヒップホップとのことで、昨年リリースされたミュージック・ビデオでも抗議活動の様子が映し出されている。氷点下で、声を出せないピケットイングを行う Jose にとって、ヤングが歌う「街に飛び出して、この問題を解決しに行こうぜ。」というメッセージは、大きな心の支えになっているのかもしれない。

さて、今年も6月15日にストライキ9周年の記念式典が行われるのであろうか。筆者としては、今年こそは労使交渉が妥結し、長く続いた戦いを終わらせる日が来ることを祈りたい。

やなぎざわ・たけし 名城大学法学部准教授。最近の主な著作に、「遺伝子情報による雇用差別——2008年アメリカGINA制定」名城法学60巻別冊224頁（2010）。労働法専攻。